



(財)米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書

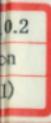
21

鳥取県米子市

むな かた まえ た
宗像前田遺跡

1997. 3

財団法人 米子市教育文化事業団



正 誤 表

ペー ジ	誤	正
9	32 褐茶灰色細粒砂	33 褐茶灰色細粒砂

序

鳥取県西部に位置する米子市は北に日本海、東に大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

この度報告致します宗像前田遺跡は中小河川改修事業加茂川改良工事に伴つて発掘調査を実施したもので、1, 300本余りの杭を打ち込んで築いた弥生時代の杭列を検出しました。この杭列は川の水をせきとめるために構築された堰のようなものであると考えられ、当時の土木技術の高さをうかがうことができます。

これらの資料が今後の調査研究及び教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただこうえで役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森 田 隆 朝

例　　言

- 1 本書は鳥取県米子市宗像地内において実施した中小河川改修事業加茂川改良工事に伴う宗像前田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は鳥取県河川課の委託を受けて（財）米子市教育文化事業団が実施した。
- 3 調査は（財）米子市教育文化事業団調査員 高橋浩樹が担当し、福嶋昌子がこれを補佐した。
- 4 遺物の実測は篠田明子、仲田いづみ、森井あづさが行い、浄書は森井が行った。
- 5 本書に用いた方位はすべて座標北（G. N）を示し、標高は標準海拔高度である。座標値は国土座標第V系を用いた。
- 6 本書は高橋が執筆、編集した。
- 7 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。
- 8 本書には平成7年度に米子市教育委員会が実施した発掘調査の概要を併せて掲載している。
- 9 ¹⁴Cの測定については株式会社古環境研究所に委託した。
- 10 現地調査及び整理作業には下記の方々の参加を得た。記して感謝致します。（50音順敬称略）

（現地調査）

池原啓志、加川都、金山勢津子、小林美恵子、酒井努、陶山富子、徳中繁野、徳中静枝、
野口稔、松本幸延

（整理作業）

梅林明子、加藤正子、篠田明子、仲田いづみ、前田光江、森井あづさ、矢野早苗、渡辺安子

目 次

1 調査の契機	1
2 地理的環境	1
3 歴史的環境	2
4 平成8年度の調査	7
1 検出遺構	7
2 出土遺物	10
5 平成7年度の調査	13
1 検出遺構	13
2 出土遺物	15
6 まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 調査地及び周辺遺跡分布図（1／4,000）	3
第2図 調査区配置図（1／1,000）	4
第3図 杭列と周辺地形（1／2,500）	5～6
第4図 杭列平面図（1／100）.....	8
第5図 南西壁及び杭列断面図（1／60）	9
第6図 杭列内出土遺物実測図（1／3）	11
第7図 第3トレソチ出土遺物実測図（1／3、1／2）	12
第8図 杭列断面図（1／40）	14
第9図 杭列平面図（1／100）.....	14
第10図 出土遺物実測図（1／3）	16

図 版 目 次

図版 1	平成8年度調査 杭列全景	図版 4	平成7年度調査 杭列断面
	平成8年度調査 杭列全景		平成7年度調査 杭列断面
図版 2	平成8年度調査 杭列断面	図版 5	平成8年度調査 杭内出土遺物
	平成8年度調査 杭列断面	図版 6	平成8年度調査 第3トレソチ出土遺物
図版 3	平成7年度調査 杭列全景	図版 7	平成7年度調査 出土遺物
	平成7年度調査 杭列全景		

1 調査の契機

中小河川改修事業加茂川改良工事は米子市街地を洪水から守るために昭和8年に開削された新加茂川放水路と加茂川本流の米子市長砂町より上流の川幅を拡幅するもので、昭和48年から事業が着手され、河口から上流へ工事が行われている。今までにこの工事に伴って目久美遺跡、池ノ内遺跡、長砂第1、第2遺跡が調査されている。平成4～8年度には米子市宗像地内で工事が計画され、平成4～6年度に下流の宗像橋付近、平成7年度に上流の宗形神社付近の左岸、平成8年度に上流の宗形神社付近の右岸の工事が行われた。

平成7年10月、工事中に米子市教育委員会の埋蔵文化財担当者が杭列を発見した。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されてはいなかったが、周辺は遺跡の分布が密な場所であり、その重要性が考えられたために同年10月、ただちに米子市教育委員会による緊急調査が行われた。つづいて平成8年度には右岸の工事が計画され、平成7年度に調査された杭列がさらに右岸にもつくものと予想されたため、工事に先立ち、平成8年5月に米子市教育委員会によって試掘調査を行った。その結果、右岸でも杭列を検出したため、事業主体である鳥取県河川課と協議を行い、本調査の実施を決定し、鳥取県河川課の委託を受けて（財）米子市教育文化事業団が調査を実施した。

2 地理的環境

米子市は鳥取県の西部に位置し、地形は中国山地より流れる日野川の両岸に広がる沖積平野（米子平野）とこれを取り囲む丘陵からなっている。米子平野は日野川によって形成された日野川扇状地、その北側に低地と発達した砂州からなる日吉津低地、法勝寺川流域に形成された法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、米子市街地の大部分をのせる米子低地からなる。

宗像前田遺跡は鳥取県米子市宗像に所在し、米子市街地の南東約3kmに位置する。

調査地は南西～北東方向にのびる高山山塊を開折する幅約70mの谷にあり、現在はここを加茂川が流れ、これと平行して国道181号線が走っている。

調査地は調査の時点（河川改修工事中）では旧河川流路内であったが、工事前はこの谷の大部分は埋め立てられ、畑、荒地となっていた。

周辺の地形を概観すると、調査地の東側は日野川と法勝寺川が合流し、岸本を扇頂とする扇状地が広がる。南側には幅700m程の法勝寺川埋積谷低地があり、調査地の南東側で日野川扇状地とつながっている。西側は標高139mを最高点とする高山山塊が連なり、行者山山塊へとつづいている。北側には米子低地（米子市街地）が広がる。

3 歴史的環境

縄文時代

草創期は大山山麓で有舌尖頭器などが採集されており、奈喜良遺跡（12）からも有舌尖頭器が出土している。

早期は尖底押型文土器が出土する遺跡が大山山麓の台地上に点在するが、調査地周辺ではこの時期の遺跡は確認されていない。

前期になると遺跡は台地上から低湿地へ進出し、目久美遺跡（1）では貝殻条痕文土器、爪型文土器、石錘、動物遺存体が出土している。

中期は現在のところあまり明確ではないが、前期から継続する目久美遺跡では貯蔵穴が確認されている。

後期には遺跡が低湿地に継続して営まれるのに加えて丘陵上にも営まれるようになる。青木遺跡（15）では250基以上の落し穴が確認されている。

晩期には遺跡の数が減少する傾向にあり、青木遺跡ではピット群と落し穴が確認されている。奈喜良遺跡では突帯文土器、石斧、石鎌が出土している。

弥生時代

前期には目久美遺跡で低湿地水田と微高地に形成された集落が確認されている。長砂第1遺跡（3）、長砂第2遺跡（4）も同様な低湿地の遺跡である。

中期には遺跡の数が急増し、遺跡の立地は低湿地から沖積台地、河岸段丘へと移行し、青木遺跡、東宗像遺跡（6）などが営まれる。青木遺跡では奈良時代まで継続する集落が形成されはじめ、土壇墓も1基確認されている。また、低湿地の遺跡も継続して営まれ、目久美遺跡では水田が確認されている。

後期には中期から継続するものと後期になって出現するものがあり、両者とも古墳時代まで継続する。前者には青木遺跡、奈喜良遺跡があり、後者には福市遺跡（14）がある。池ノ内遺跡（2）では水田が確認されている。

古墳時代

前期は古墳では1辺21mの方墳の日原6号墳（10）があり、古墳時代前期の墳丘多葬例として注目される。青木遺跡では方形周溝墓、円形周溝墓が確認されている。集落では弥生時代から継続して営まれるものが多く、福市遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡がある。

中期は古墳では全長32mの前方後円墳で、地山の岩盤をくりぬいた特異な埋葬施設をもつ宗像41号墳、倣製斜線八神鏡が出土した水道山古墳（5）がある。また、青木遺跡では前方後円墳、方墳、円墳の多様な小古墳群が形成されている。集落では福市遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡がある。

後期には小規模な群集墳がつくられ、横穴式石室を主体とする宗像古墳群（8）、横穴式石

室と箱式石棺を主体とする東宗像古墳群（6）などがある。また、横穴墓の築造が行われるようになり、東宗像古墳群からは19基の横穴墓が確認されている。集落は福市遺跡、青木遺跡から諏訪遺跡群へと広がり、長者原台地一帯に分布している。

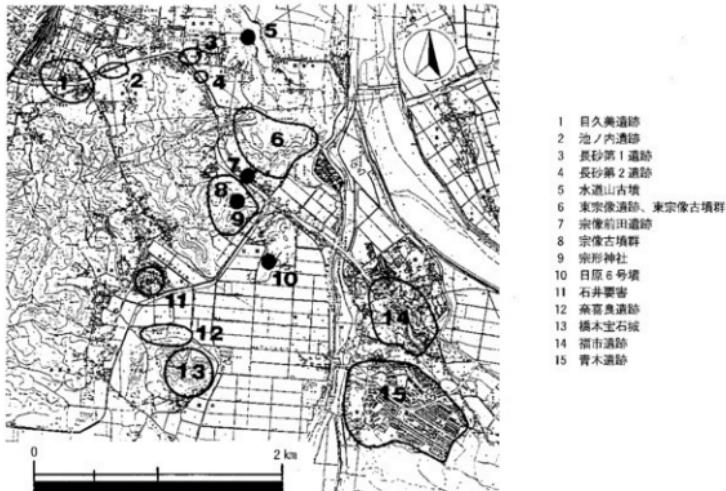
奈良、平安時代

奈良時代には福市遺跡、青木遺跡で掘立柱建物で構成される集落が確認されている。平安時代には宗形神社（9）が延喜式に記載されている。

中世～近世

中世には戦国期の動乱を背景として石井要害（11）、橋本宝石城（13）などが築かれる。また、青木遺跡では鎌倉時代末～室町時代初頭の中世墓があり、長砂では鎌倉時代前期と推定される経筒が発見されている。

江戸時代には吉川広家によって築城が始まっていた米子城を中村一忠が完成させ、1601年に中村一忠が入城した。その後、米子城は鳥取藩の支城として存続したが、明治になって廃城となった。

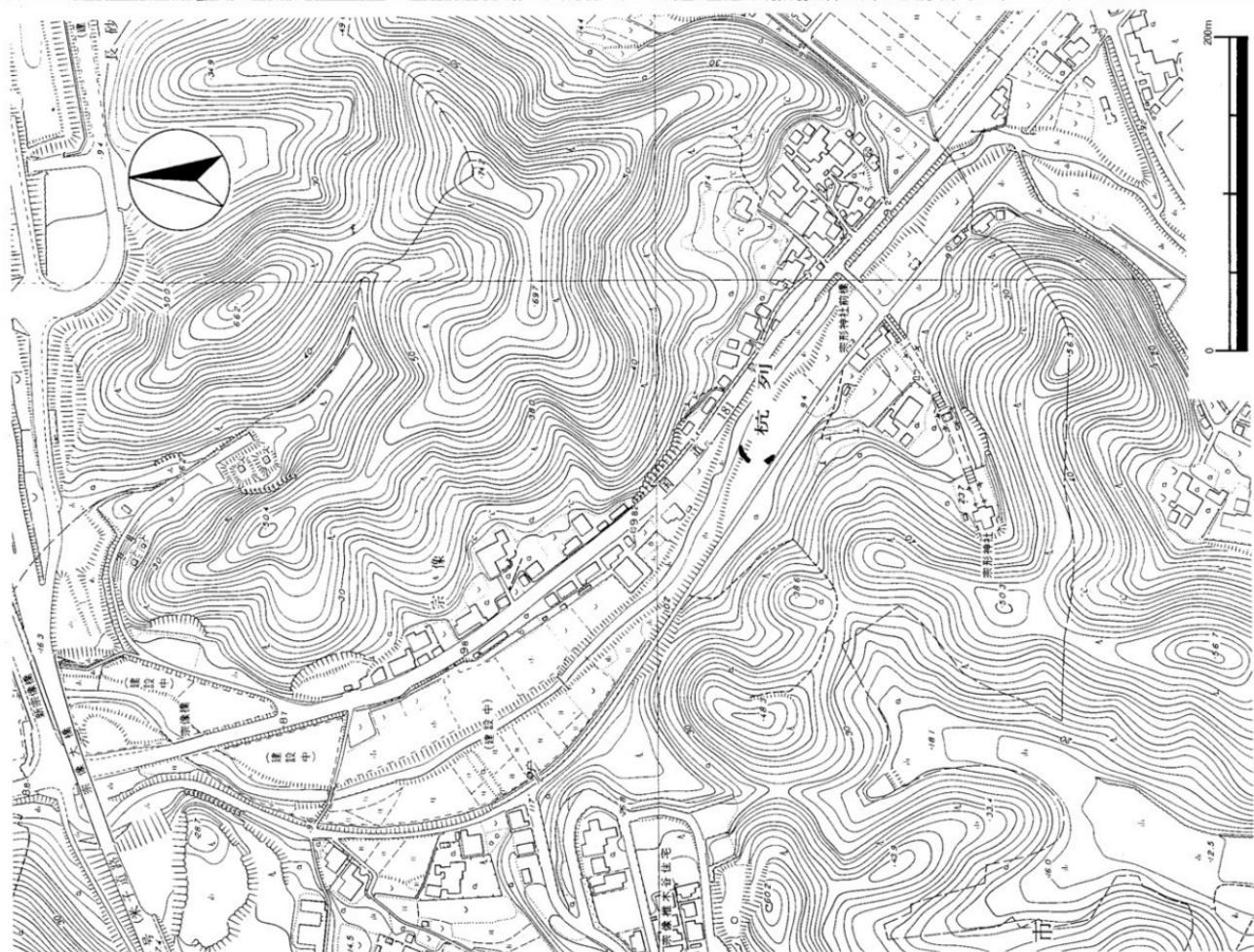


第1図 調査地及び周辺遺跡分布図



第2図 調査区配置図

第3图 林列七周地形



4 平成 8 年度の調査

1 検出遺構

1 第1トレンチ

第1トレンチは調査地の最上流に設定した長さ8m、幅1.5mの調査区である。第1トレンチでは調査区の北東側で南東一北西方向にのびる幅2mの杭列を検出した。この杭列は改修工事前の加茂川流路の左岸の肩とほぼ一致し、杭が打ち込まれた黒色粘土層から近現代の陶磁器が出土していることから近現代の加茂川流路の護岸用の杭列であると思われる。第1トレンチからは弥生土器、須恵器が出土した。

2 第2トレンチ

第2トレンチは第1トレンチの下流19mに設定した長さ11m、幅1.5mの調査区である。第2トレンチでは遺構は検出されなかった。第2トレンチからは弥生土器、土師質土器、近世陶磁器が出土した。

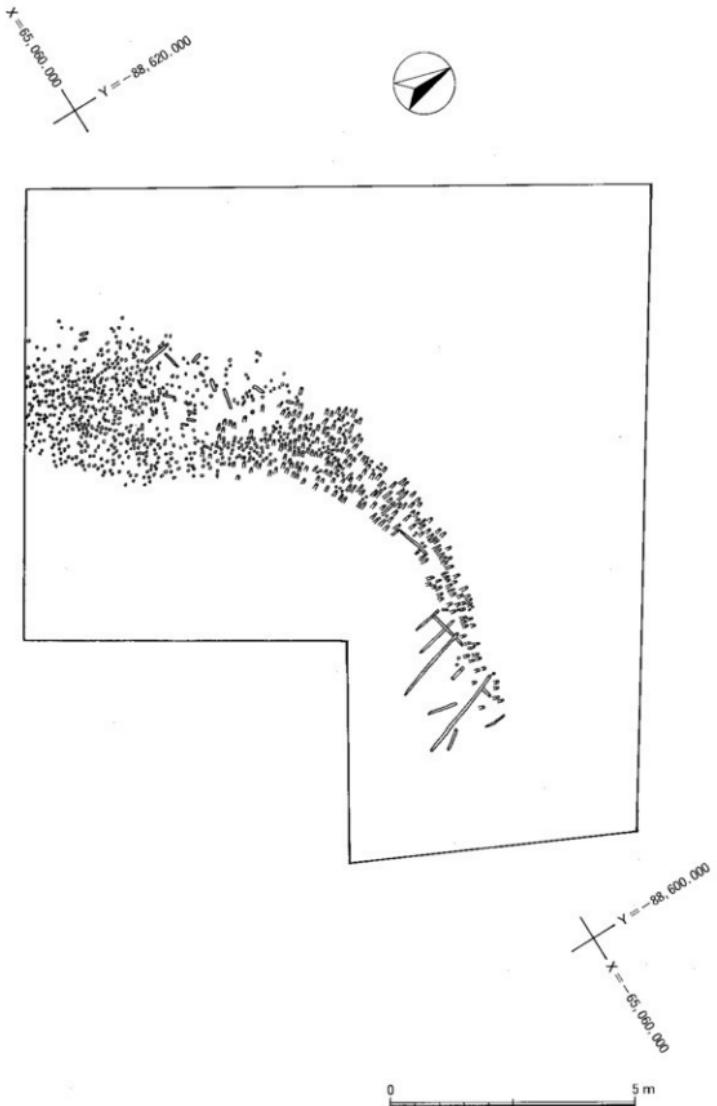
3 第3トレンチ

第3トレンチは第2トレンチの下流に設定した調査区で、当初は長さ13m、幅9mで設定していたが、杭列が東にのびており、この杭列の範囲を確認するために調査区の東側を拡張した。第3トレンチでは弥生時代中期の堰状の杭列を検出した。

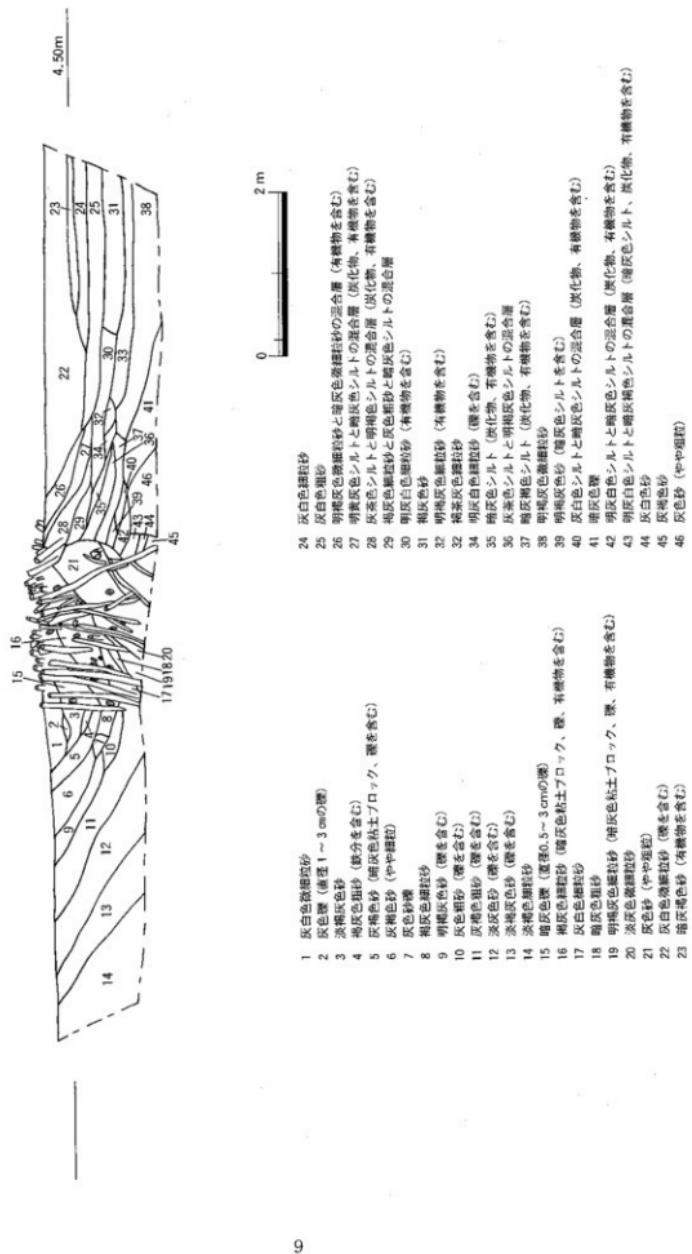
杭列（第4、5図）

杭列は長さ13mにわたって検出した。幅は0.5～3.5mをはかり、東から南西へ湾曲してのび、平成7年度に検出された杭列とつながるものと思われる。杭列には1,300本余りの杭があり、杭はすべて先端が尖らせてある。杭には長さ0.7～1.8m、太さ3～11cmのものがあり、長さ1.2～1.4m、太さ5cm前後のものが多く使われている。この杭列は構造と川の流れに直交することから堰状の施設であると思われる。

杭列は構造によって大きく2つに分けられる。杭列の東側7.5mは北または北西側に杭を傾けて打ち込んでおり、4～数列の杭列が認められる。これらは列単位ではなく等間隔に杭が打ち込まれている部分もあるが、大部分は杭の間隔には規則性は認められない。また、杭には水平またはクロスさせた横木がわたしており、さらに、水流による杭列背部の砂の流出を防ぐために小枝、樹皮がかませてある。杭列の南西側は水が当たる前面は杭をほぼ直に打ち込み、これに水平に横木をわたしている。さらに、前面の杭を支え、補強するために背部に杭を斜めにしたり、クロスさせたりしている。この杭列は杭列内から出土した土器と¹⁴Cの測定結果（AD25年）から弥生時代中期のものであると考えられる。



第4図 桁列平面図



第5図 南西壁及び析判断面図

2 出 土 遺 物

出土遺物は著しく摩滅しており良好なものは少ないが、ここでは杭列に関係するものと思われる。杭列内と第3トレンチから出土した遺物を報告したい。

1 杭列内出土遺物（第6図）

弥生土器（1～14）

前 期（1～5） 1は壺で、口縁は大きく外反する。摩滅が著しいために調整は不明である。2～4は甕である。2は口縁が外反し、外面には1条のヘラ描沈線がある。3は口縁が逆L字状を呈し、外面には3条のヘラ描沈線がある。4は口縁が逆L字状を呈する。5は小型壺であろう。器高に比べて胸部径が小さく、スマートな器形になると思われる。

中 期（6～8） 6は広口壺で、口縁を大きく外反させ、口縁外面には山形文がある。7、8は甕である。7は口縁がく字状に外反し、器壁はやや薄手である。8は口縁がく字状に外反し、口縁端部を上方へ大きくつまみ上げる。口縁外面には2条の凹線がある。

後 期（9） 9は甕で、器壁は厚い。口縁外面には8条の平行線がある。口縁内面にはヘラミガキを施す。

底 部（10～14） 10は外面にヘラミガキを施す。11は外面にはヘラミガキ、内面にはハケ調整を施す。12は外面にハケ調整を施す。13は外面には縦方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキを施す。14は内面にハケ調整を施す。

土師器（15）

15は無頸壺で、口縁端部は平坦な面をもつ。内面にはナデ調整を施す。

2 第3トレンチ出土遺物（第7図）

弥生土器（16～19）

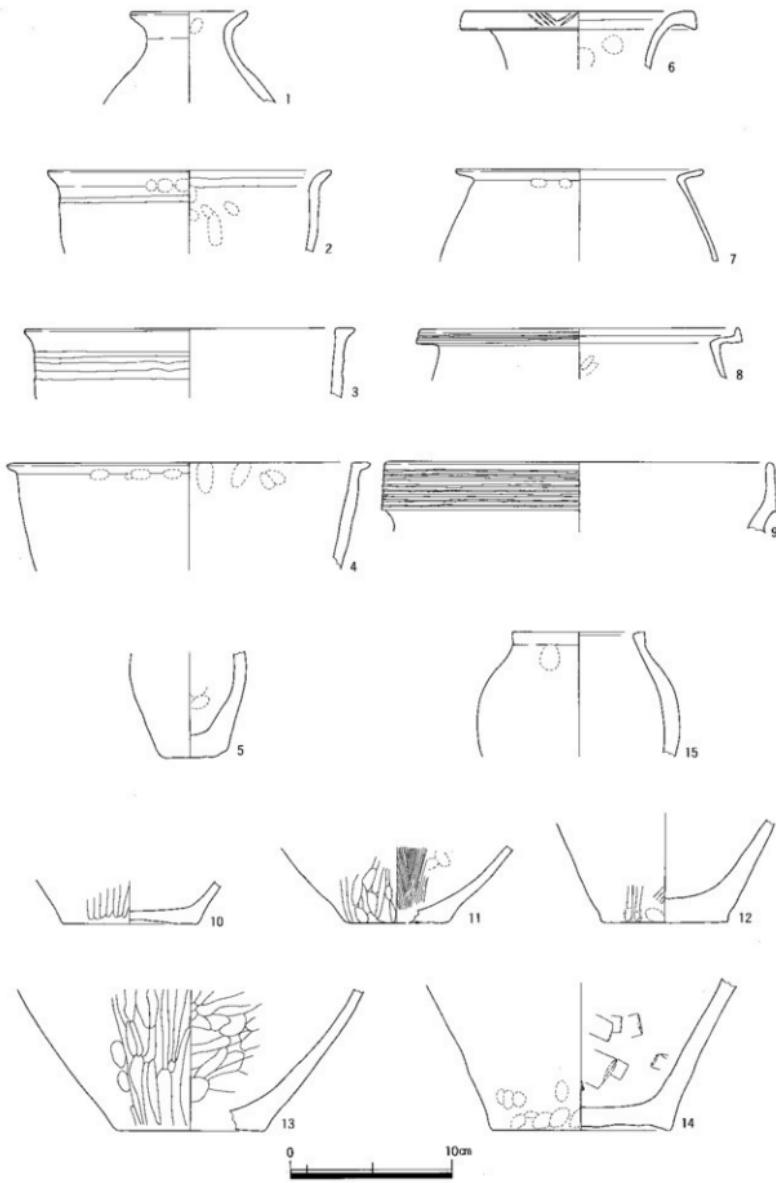
16～18は中期の甕である。16、17は口縁がく字状に外反する。16は内面にナデ調整を施す。18は口縁がく字状に外反し、口縁端部を上方へつまみ出す。口縁外面には刻み目がある。19は底部がハ字状に開き、底面はやや上げ底である。

土師器（20～23）

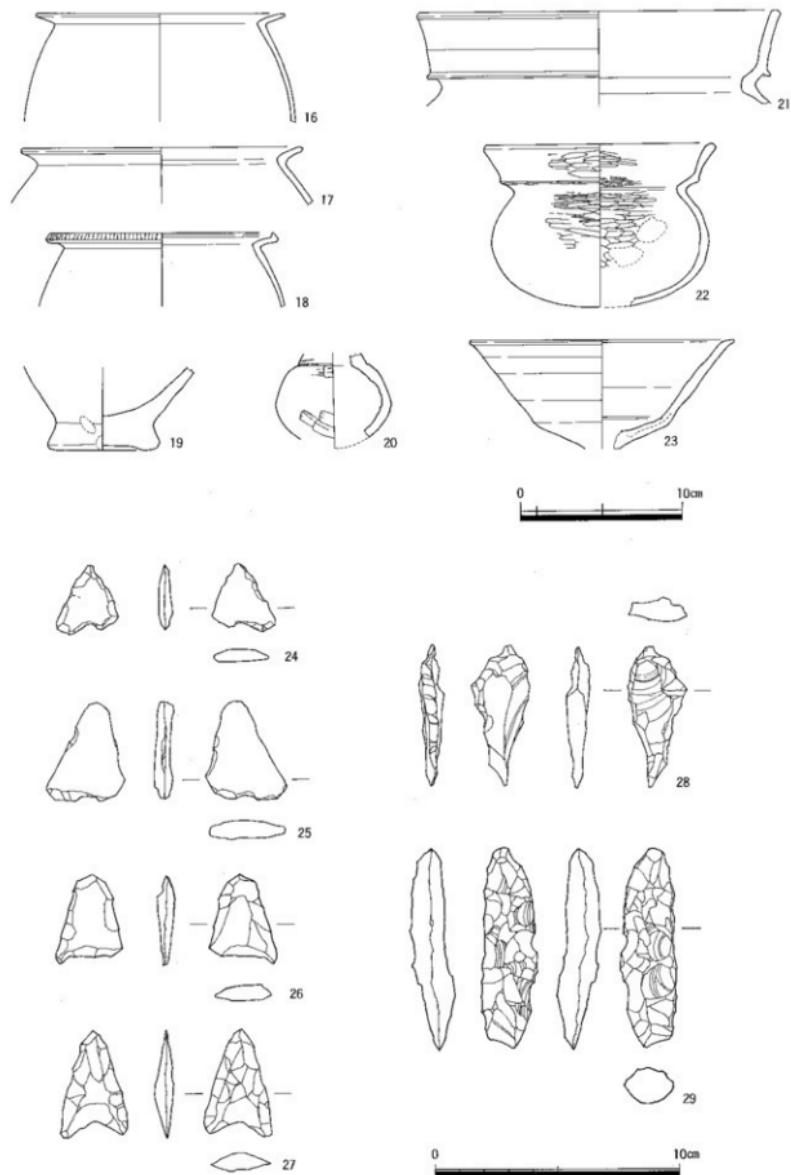
20は小型丸底壺で、直立する短い口縁をもつものと思われ、外面上半部にはヘラケズリ、下半部にはハケ調整を施す。21、22は複合口縁をもち、口縁端部は肥厚する。21は口縁下端が突出する。胸部内面にはヘラケズリを施す。22は内外面ともヘラミガキを施す。21、22は青木VII期に属する。23は高坏で、坏部下半部に稜をもつ。口縁は外傾し、さらに口縁端部は外反する。

石 器（24～29）

24～27は石鎌で、すべて凹基式無茎鎌である。28は石錐、29は石槍である。



第6図 杭列内出土遺物実測図



第7図 第3トレンチ出土遺物実測図

5 平成7年度の調査

平成7年10月、宗形神社前やや下流左岸の加茂川改修工事現場にて、杭列が発見された。そのため、米子市教育委員会が緊急に発掘調査を実施した。

調査は、工事による影響を受けると考えられる部分について実施したため、杭列全体の様相は把握できていない。

また、杭列の南部分については、加茂川左岸の法面のなかに入り込んでいる。

以下、その概要を述べる。

1 検出遺構

杭列(第8、9図)

杭列は、加茂川左岸の丘陵から張り出す基盤層に打ち込まれている。約1m堆積した粗砂を取り除いたところで確認した。検出した範囲は、ほぼ直角三角形状を呈しており、斜辺9m、短辺4m、長辺8mを測る。検出した杭列の南東部分は、杭が倒れた状況であり、河川の影響で倒れたと考えられる。

杭列は、丘陵側(南西側)が粗く、川側(北東側)が密になっている。

北東-南西の断面を観察すると、基本的に、杭は垂直に打たれているが、中程から川側(北東側)の杭は南西側に傾いている。これは、河川の影響を受けたものと考えられる。北西-南東の断面の観察では、横木を渡したり、クロスさせたりして杭を補強していることが確認できた。

杭は、ツタ類で結縛した痕跡が確認された。また、杭の樹種は、シイ、カシがほとんどで、サクラが若干みられた。

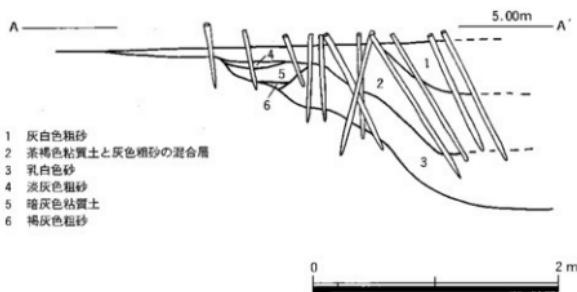
杭列中及び周辺から、第10図の遺物が出土しているが、明確な時期は不明である。第10図の3、10が杭の間から出土し、12、13が杭の上端から出土している。

今回検出された杭列は、形態的には堰と考えられるが、立地を考えると、性格に不明の点が多い。性格として考えられるのは、

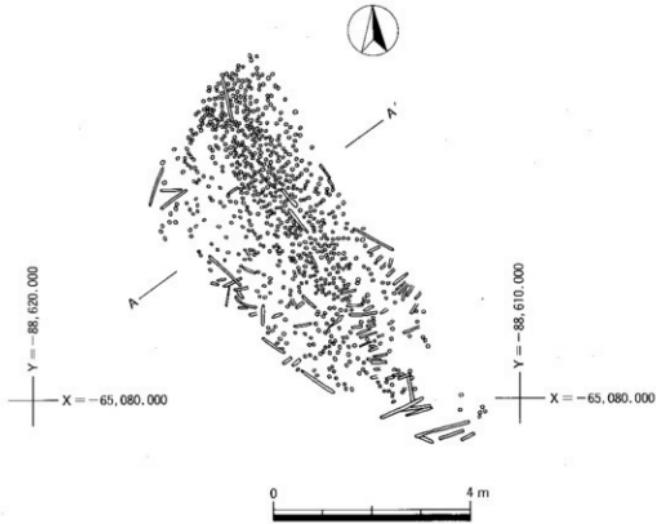
- ①堰
- ②橋の土台
- ③護岸

などが挙げられるが、明確な回答は得られていない。

また、この杭列は、多量の粗砂に覆われているが、下流の長砂町～目久美町にかけての発掘調査の結果でも同様な粗砂の堆積がみられており、杭列が粗砂によって埋没したときに下流の地域も粗砂で埋まつた可能性が考えられ、この時期(弥生時代中期?)にかなり大規模な洪水が発生した結果と推定される。



第8図 桁列断面図



第9図 桁列平面図

2 出土遺物

弥生土器（第10図）

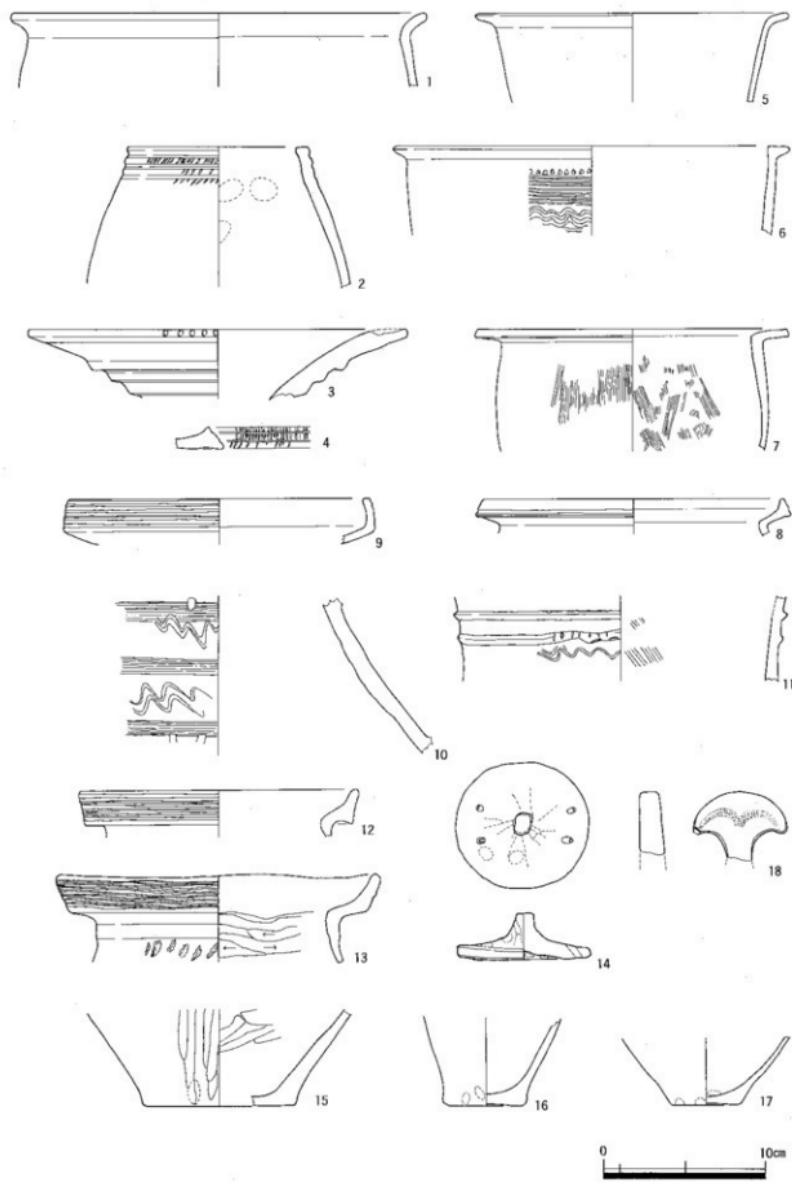
前期（1） 1は壺で、口縁はく字状に外反する。摩滅が著しいために調整等は不明である。

中期（2～11） 2は無頸壺で、口縁外面に3条の凹線があり、凹線間及び凹線の上下端に斜めの刻み目がある。内面はナデ調整を行う。3、4は広口壺である。3は口縁内面を欠損するが、頸部には断面三角形の突帯が巡る。口縁端部には刻み目がある。4は口縁外面には3条の凹線が巡り、その上には上半部に縱方向の刻み目、下半部に斜めの刻み目がある。5～8は壺である。5は口縁がく字状に外反する。6は口縁が逆L字状を呈し、外面には9条の櫛描平行線が施され、その上には三角形のスタンプ文が押捺され、櫛描平行線の下には波状文があり、さらにその下には櫛描平行線が施されている。7は口縁がく字状に外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。口縁外面には1条の沈線を施す。内外面ともハケ調整を行った後、頸部をヨコナデ調整する。8は口縁が外反した後、端部が上方へ立ち上がる。摩滅が著しいが、口縁外面には2条の凹線があり、その上には斜めの刻み目があったものと思われる。9は高杯で、口縁はやや内傾し、端部は平坦な面をもつ。口縁外面には5条の凹線が巡る。10、11は器種が不明確であるが、10は壺あるいは壺の肩部であろう。上下に断面台形の突帯があり、その上には長方形の浮文がある。突帯間に8条1単位の3本の平行線があり、平行線間に波状文がある。これらの平行線、波状文はハケ調整後に施されている。11は壺の口縁であろうが傾きが不明確である。頸部には2条の断面三角形の突帯が巡り、その上には刻み目がある。突帯の下には波状文がある。内面はハケ調整を施す。

後期（12、13） 12、13は壺である。12は口縁外面に6条の平行線が巡る。口縁内面にはヘラミガキ、胴部内面にはヘラケズリを施す。13は口縁外面に9条の平行線が巡る。胴部内面にはヘラケズリを施し、頸部外面には貝殻による刺突文がある。

時期不明（14～17） 14は壺の蓋で、つまみから放射状につまみを成形する際のシボリ痕がみられる。つまみはつまみやすいように隅丸長方形を呈する。2対4個の紐穴がある。15～17は底部である。15は内外面ともヘラミガキを施す。17は内面にヘラミガキを施し、外面は摩滅が著しいが、ハケ調整を施していたものと思われる。

分銅型土製品（18） 18は表面は凸面、裏面はほぼ平坦で、頭部縁辺部から頸部にかけて次第に厚くなっている。頭部中央部には3～4条の列点文によってほぼ左右対称に円弧状の文様が表現されている。



第10図 出土遺物実測図

6 まとめ

今回の調査では1,300 本余の杭を打ち込んだ弥生時代中期の杭列を検出した。平成7年度の調査では対岸でこれと同様の杭列を検出しており、これらの間には川が流れているために調査は不可能であったが、これらは構造的に似ており、しかも時期的にも一致していることから、これらは一連のもので、湾曲してつながるものと考えられる。

これらの杭列は構造と河道に直交することから堰のような施設であると考えられ、川をせき止めて導水または水量調節のために築かれたものと考えられる。また、杭列が湾曲してのびるのは川の流れの抵抗を弱めて、杭列の崩壊を防ぐためであろう。

しかし、ここで、なぜこの場所に杭列が築かれたのかが問題となる。下流の目久美遺跡、池ノ内遺跡、長砂第1、2遺跡では弥生時代の水田が確認されているが、この場所からは距離が離れ過ぎており、これらの水田に導水したものとは考えにくい。また、調査地の周囲は両側まで山がせまり、堰を築いて川から導水するほどの大規模な水田を営むような平地は存在しない。調査地の周辺では東宗像遺跡で弥生時代中期の集落が確認されているが、これは丘陵上に位置し、川との比高差がかなりあり、その関連性は考えにくく、現在のところ東宗像遺跡以外、当該期の遺跡は確認されていない。さらに、今回の調査では杭列の関連施設（用水路等）を確認しておらず、現時点では杭列が築かれた目的及び杭列とその周辺との関連は不明である。

杭列の周辺の地形をみてみると、杭列は川の両岸から張り出す尾根と尾根との間にあり、これらの尾根と杭列によって川をせき止めるかっことなる。杭列の上流の両岸にはこれらの尾根とさらに上流の法勝寺平野との境に川の両岸から張り出す尾根とにはさまれた狭小な谷が存在する。現在、これらの谷は左岸には宗形神社、右岸には宗像の集落がある。また、杭列の下流の左岸には比較的大きな谷がある。今回検出した杭列はこれらの谷のいずれかに関連するものと思われるが、その解明は今後の調査を待たなければならぬ。

図 版



平成 8 年度調査 杭列全景



平成 8 年度調査 杭列全景

図版 2



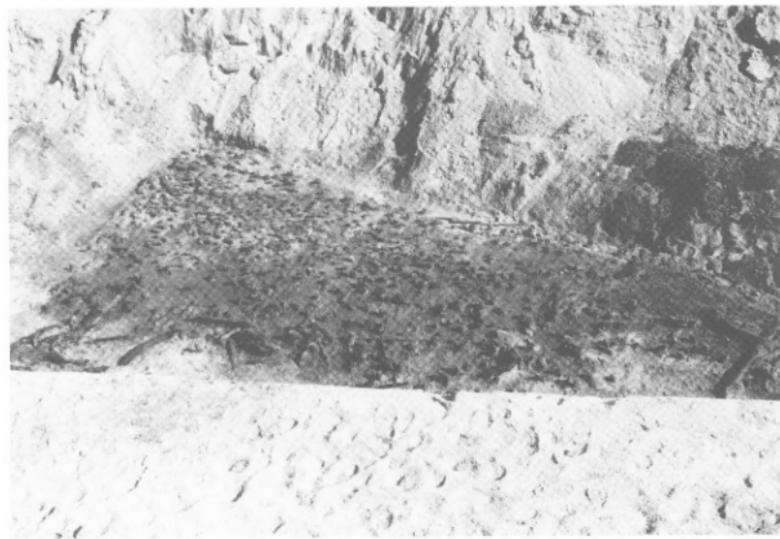
平成 8 年度調査 桧列断面



平成 8 年度調査 桧列断面

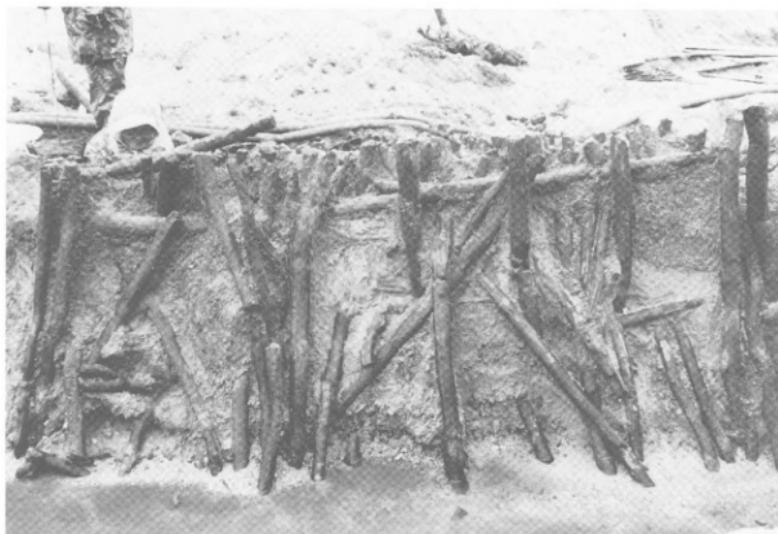


平成 7 年度調査 杭列全景



平成 7 年度調査 杭列全景

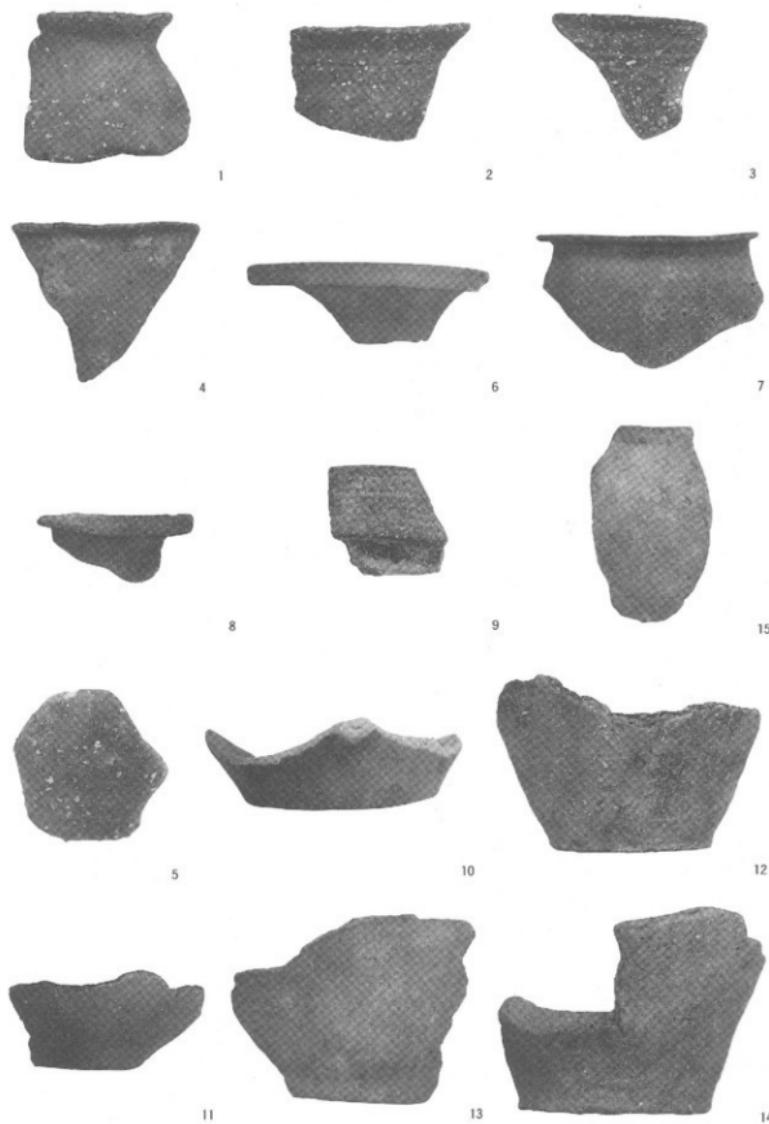
図版 4



平成 7 年度調査 杭列断面

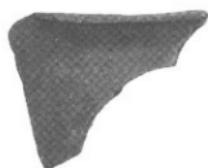


平成 7 年度調査 杭列断面



平成 8 年度調査 桶列内出土遺物

図版 6



16



20



17



21



18



22



19



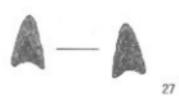
23



24



26



27



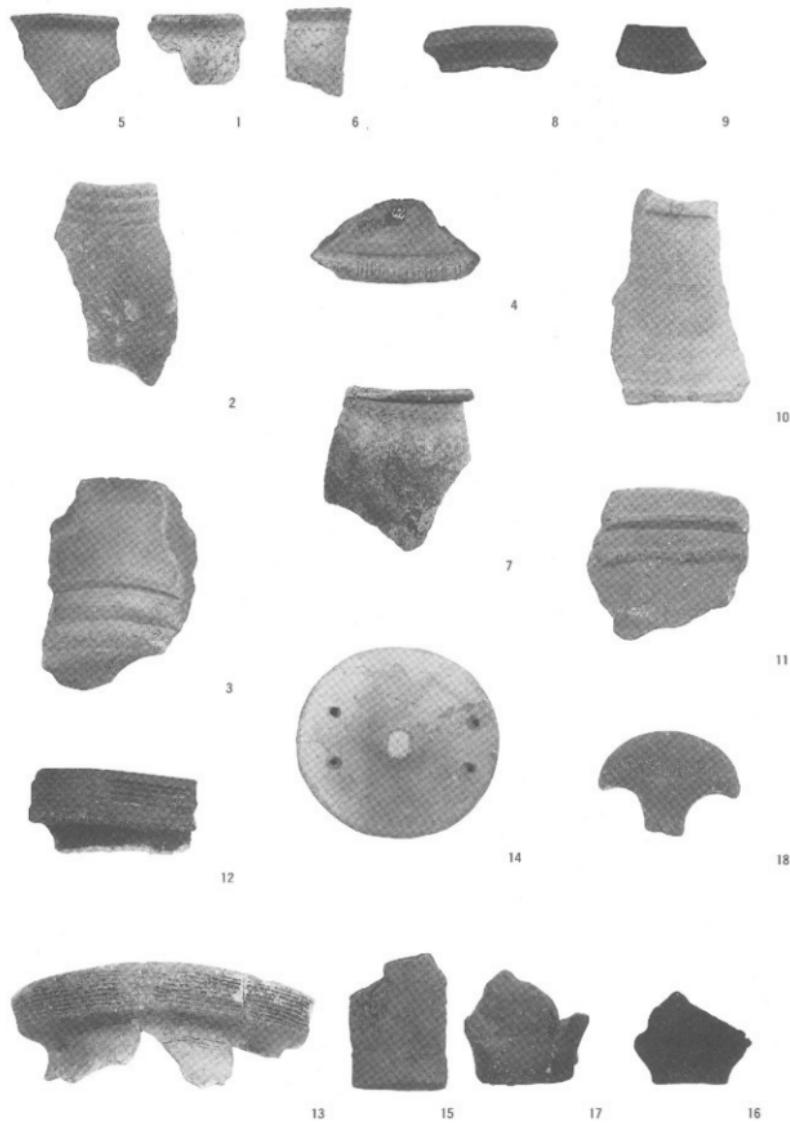
25



29

28

平成 8 年度調査 第 3 トレンチ出土遺物



平成 7 年度調査 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	むなかたまえたいせき							
書名	宗像前田遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	21							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683 烏取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因	
むなかたまえたいせき 宗像前田遺跡	とつとりけんよなごし 鳥取県米子市 むなかた 宗像	31202	35度 24分 34秒	133度 21分 29秒	19960722～ 19960819	1.7 m ²	河川改修	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宗像前田遺跡	弥生時代	杭列		弥生土器、石鎚、石錐、石槍、 分銅型土製品、須恵器、土師器、 陶磁器			弥生時代中期の杭列	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 21

宗像前田遺跡

1997年3月

編集・発行 財団法人米子市教育文化事業団

〒683 烏取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社